イタリア素描の主題研究

鯨井 秀伸

二〇〇二年の展覧会で大英博物館所蔵のフランス素描展が開催されたが、担当分野で数点の作品について主題研究を反映させた。本小論では、継続して同館所蔵のイタリア素描について広義の主題を調査してみたい。選択したのは、一九六二年刊の『イタリア素描 ラファエッロとその周辺』の内、ラファエッロからペリーノ・デル・ヴァーガまでである。オーナメントに関わる作品については、主題の扱い方が別に考えられるため、ここでは割愛した。主題の同定記述には、近年多数の機関で活用されているICONCLASSを使用した。全体として、主題索引の形式を取っているため、表記は英文のままとし、別頁にカタログとしてまとめた。

以下では、『イタリア素描』で主題を保留されている数点の作品について、その主題を探ってみたい。紙数の関係上簡潔に記述し、主題の同定のみに限った。各カタログ番号の次に『』で主題を記し、BMカタログの主題を次に付け加えてある。別頁の索引中では、カタログの記述を尊重し、参照としてイタリックで主題を付け加え、各項目の末尾にICONCLASSコード及びテキストを列挙した。

カタログ番号一五〇『部族王の降服を受けるクラウディウス』
Cat. No. 150 Claudius accepts the surrender of the Tribal Kings.
BM主題：蛮族の王より忠誠の宣誓を受けるローマの将軍（図1）

本素描は、画面右にローマ兵を率いる将軍がローマの旗を右手に持って立ち、画面左には帽子を被った蛮族の王と思われる人物が、数人の兵士を従えて跪き、ローマの旗に忠誠を誓っている。また背景には川が流れているように思われる。背景中央の岸辺には「河」の擬人像がコルヌコピアを抱えて横たわっている。ローマの旗には、鷲がいる（旗の装飾かもしれない）。

主題に関連する描写は、宣誓を受けるローマ軍、軍旗の鷲、蛮族の降服、背景の川あるいは大洋などである。

鷲をアトリビュートにもつ将軍は絵画史の上では皇帝クラウディウスがいる。「一羽の鷲が、将来のローマ皇帝クラウディウスの肩に止まった」、という故事が知られている（註1）。彼は、現在失われた彼の凱旋門の銘記によれば（ローマのカピトリーニ美術館中庭）、「十一人のブリテンの部族王の降服を受け、ローマ人の統治下にあって、大洋を越えて蛮族の人々をもたらした最初の者」と記されている。ブリテンへの侵略は、四十三年五月アウルス・プラティウスによって開始され、クラウディウスが増援隊と共に到着したのはその年の初秋であった。彼は原住民に印象づけるため、カムロドゥヌム（クロチェスター）でパレードを行い、その後勝利を祝うため四十四年にローマに戻っている。彼のローマにおける軍事的信任は、この事によって確固としたものとなったのである。本素描の背景の河神のいる水流は、テベレ川とも思われるが、ローマの地、あるいはローマの支配下の地を意味しているのかもしれない。鷲のいる軍旗については、「鷲旗」は槍の先に翼を広げた金属性の鷲が止まっているものが通常のようであり、竿の先に四角の布地を付けたものが「分遣隊旗」であるため、本素描に描かれているのは、「分遣隊旗」に止まる鷲ということになる。したがって「鷲」は中央の軍人のアトリビュートと考えてもよいだろう。以上より、故事の記述、碑銘、河神、鷲のアトリビュートから、おそらく本素描は、この故事に基づいたものと考えられる。

カタログ番号一五八『ティモクレアの高潔を称えるアレクサンドロス大王』

Cat. No. 158　Alexander praises Timocleal's Virtue.

ＢＭ主題：古典的伝説の情景、二人の坐る男の前に跪く女、腿に包帯を巻く男（図2）

ＢＭカタログでは、以下の三つの主題候補が上げられており、「スキピオの自制」「アレクサンドロス大王とティモクレア」「競争に勝ったアタランテ」、前者二つは不適切であるとされ、アタランテについては、本素描に関するルーヴルのコピーに銘記があるという記述がなされているだけである。主題概念として「寛大な行為（Magnanimity: 'Magnanimita'(Ripa)）」が示唆されているが、この素描の場合それは適切な主題と思われるものの、「自制（Continence: 'Continenza militare' (Ripa)）」を追加しうると考えられる。

アタランテについては、メレアグロスとの狩猟の物語と考えられるが、本素描とは一致しない。自制あるいは寛大な行為については、アレクサンドロス大王、キュロス、スキピオの各物語が知られている。スキピオの自制については、絵画史において表現されてきたのは、スキピオの前に跪く婚約者アルキウスであり、差し出された少女は立つ全身像で描かれてきた。キュロス王は、アブラダテスの妻パンテアを放棄したが、その表現はあまり知られていない。本素描は、おそらくアレクサンドロス大王の物語からの主題だろう。マルカントニオの「旗手（standard-bearer）」への関連性を指摘されている人物を含む、画面右で負傷した男を手当てしている一群は、戦

闘中であったことを示していると考えられる。アレクサンドロス軍は、テーバイの町を掠奪していたのである。プルタルコスの『英雄伝』によれば、アレクサンドロスの前のティモクレアは、彼女を辱めたトラキア人の隊長に復讐を果たしたことで、周囲の兵士から責められていると思われる。彼女は右手を胸に当て自らの出自の正当性を主張する姿に表され、脇に立つ兵士は事情を説明して彼女を糾弾しているようである。アレクサンドロスは彼女の答えと行動に感心し、彼女を自由の身にした。アレクサンドロスは杖をもち右手で彼女を指さす人物と思われる。彼を両手で抱えるようにして坐る右側の人物については不明であるが、関連するリール（Pluchart, Lille, 367.）（註2）及び大英博物館素描（Michael Coxcie, 1946-7-13-151.）においてもその扱いは、前者では座す人物は一人であり、前者と構図的に一致している後者では髭のある王冠を被った老人に表されていることから、本素描は、手本からの別ヴァージョンのものかもしれない。

カタログ番号一七二『マルス神殿からドラゴンを追放する使徒ピリポ』

Cat. No. 172　Banishment of a Dragon out of the Temple of Mars by the Apostle Philip.

ＢＭの主題：聖人とドラゴン（図3）

ＢＭカタログでは、本素描と関連する八点の素描を上げて、聖パウロ、聖ペテロなどの聖人伝と関連づけ、バルチュはボナソーネの版画に基づき「悪魔をドラゴンの姿で飛び去らせる聖パウロ」と解釈している。ジェームソンは、聖ピリポではないかとしている。神殿の前で、光輪のある髭をはやした人物が、右手を上げ左手で促すかのように使徒左後方のドラゴンを見下ろしている。

まず、聖パウロ、聖ペテロの生涯には本素描に関連する場面はない。『黄金伝説』によれば、十二使徒の一人ピリポは、ヒエラポリスのマルス神殿で礼拝されていたドラゴンを、十字架の助けにより追い出したとされる。彼のアトリビュートは通常十字架とドラゴンであるが、美術作品に取り上げられることは少ないものの、フィリッピーノ・リッピの『使徒ピリポの奇跡』（一五〇二年フィレンツェ、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂）（図4）が知られている。リッピの作品では、神殿内祭壇の前でピリポが右手を上げ、ドラゴンに飛んでいくよう命じている。本素描に十字架は見られないが、ドラゴンをアトリビュートに持ち、またドラゴンの登場する聖人の記述でこの場面に相応しいものは他に見られないことから、本素描の主題は使徒ピリポの生涯からの場面と思われる。

カタログ番号一八五『神々の集会　ユピテルの前で抗弁するクピドとウェヌス』

Cat. No. 185　The Assemble of the Gods: Cupid and Venus plead their cause before Jupiter.

ＢＭ主題：古典神話の情景（図５）

ＢＭカタログでは主題の同定は不能としている。

素描の表現は簡略であり、全体的構想を示すような描かれ方をしている。画面左側に男が一人坐り、後に女が坐っていてその隣には女が立っている。中央には子供が両手を上げ、坐る男がそれに反応している。子供の後には女がおそらく松明を持って立っている。その周囲に数人の人物がいる。おそらく神話からの情景と思われるが、松明がクピドあるいはウェヌスの愛に関するアトリビュートであり、逆さになっていることからウェヌスがクピドから取り上げたものと考えられる。そうすると椅子に座るのはユピテルと思われ、その情景は、アプレイウスの『変身物語』第六巻二十三行以下に記述されているプシュケとクピドそしてウェヌスの軋轢を神々の前で弁明する主題と関係があると推測される。この主題は、カラーリオの銅版画『神々の集会』（図６）に見ることができ、そこには左側にユピテルに弁明するウェヌスとクピド、右側にメルクリウスとプシュケの物語が描かれていて、二場面を関連付けるのはプシュケである。カラーリオの版画は、ファルネジーナ宮の『クピドとプシュケ』の中の天井画『神々の協議』（図７）と関連している。ラファエッロには関連素描が知られており、壁画右半分ユピテルの前のウェヌスとクピドを描いたものがある。本素描はカラーリオの版画の左半分に類似しており、おそらくこの版画に見られる情景に関連したヴァージョンの素描かもしれない。同様の主題は後年、ヤンセンス『オリュンポス』（一六二〇年）などにも描かれている。

註

（1）A.B. Jameson, *Sacred and Legendary Art*, London, 1976(1895). p.144.

（2）Pluchart, Lille: M. Henry Pluchart, *Ville de Lille, Musee Wicar. Notice des dessins... exposes precedee d'une introduction et du resume de l'inventaire general*, Lille, 1889.

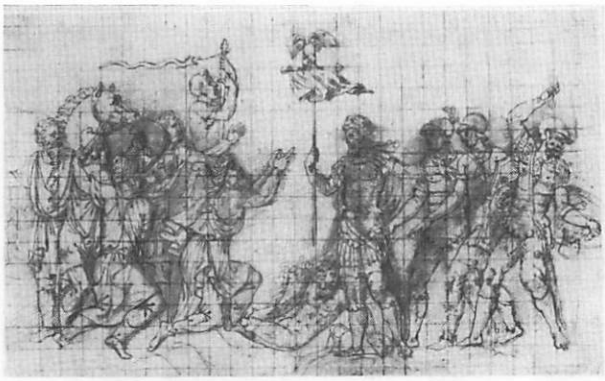

図1『部族王の降伏を受けるクラウディウス』

図3『マルス神殿からドラゴンを追放する使徒ピリポ』

図2『ティモクレアの高潔を称えるアレクサンドロス大王』

図4『使徒ピリポの奇跡』

図5『神々の集会 ユピテルの前で抗弁するクピドとウェヌス』

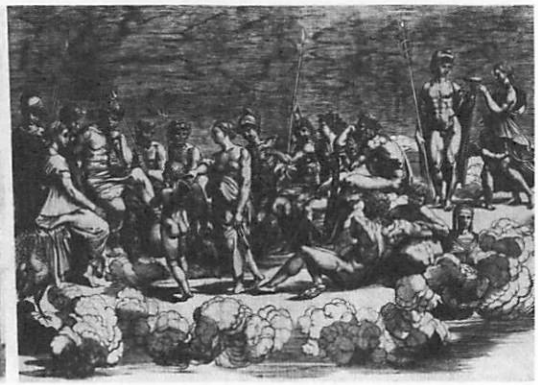

図6『神々の集会』

図7『神々の協議』